

本所相生町一ツ目橋そばの高田屋は、主人七兵衛が庖丁の腕一本で興し、大きくしてきた賄い屋である。

賄い屋とは、別名「お賄い」「炊出し」とも呼ばれる、いわば弁当屋のことである。江戸城中の役人や、見附警護の役人たち、三百諸侯の武家屋敷や組屋敷に弁当を入れる稼業である。人の暮らに食事は欠かすことのできないものであり、偉いお侍だって腹はへるのだから、これは結構に大きな商売だった。

とはいっても、けっして易しい商いではない。高田屋も、ここまで来るには並大抵の道のりではなかった。

ひとつには、相手は三百諸侯でも、その大方が金詰まりで、削れるところは爪先の皮まで削れという具合につまつまやりくりをしているところばかりだということだ。ひしめきあう商売敵をかわして出入りの賄い屋の座をつかむには、時には儲けをつぶしてでも安くて旨い弁当を運ばねばならない。

もうひとつには、最初から相手が決まっている商いなので、右には義理があり、左には遠慮があ

り、上にははばかりがあり、下にはつてがあるという具合で、何でもいいからいい仕事をして、派手に売り出せばそれで大繁盛というわけにはいかないということである。とりわけ、新参者が食い込むのは難しい。

七兵衛はもともと江戸の生まれだが、親の顔もはっきり覚えていないうちに捨てられ、世間の垢と泥にまみれて育ち、十二、三のころには、見事、かつばらいや泥棒は当たり前、他人のことなど頭から信用しないという、拗ねた目つきの子供に仕立てあがっていた。そのまま進んでいたら、立派に一人前のごくつぶしになっていたことだろう。

七兵衛の道が変わったのは、十三の歳の春、花見のころに、にぎわう浅草の花見客相手に繁盛していた天ぷら屋台からかつばらいをして、逃げ切れずに捕まったときだった。この天ぷら屋台の親父は、一見、煮染めたような顔色の爺に見えたが、どうしてどうして七兵衛を追いかける足は韋駄天のように速く、あっと思ったときにはもう後ろ首をつかまれて、ぐいとつり上げられていた。

後で判ったことだけれど、この爺はこうしてかつばらいの子供をとつ捕まえるのが得手で、今までもたくさん手柄があつたのだという。捕らえた子供を番屋に突き出すようなことはなく、かつばらった分だけ屋台を手伝わせ、説教をして放してやるのが大好きだという、捕らわれた側から見れば、便所虫のように嫌らしい爺だった。

爺は七兵衛も同じように扱った。屋台の後ろで洗い物をさせ、お客に頭を下げさせた。逃げようとする、そのたびに疾風のように追いかけてきとつ捕まえる。七兵衛は二刻（四時間）のあいだに八度逃げ、そのたびに捕まって、最後にはすっかり息があがってしまったが、爺は涼しい顔をしていた。

屋台を畳むころになって、こき使われた疲れと、逃げ損なった疲れとでぐったりしている七兵衛

をつくづくとながめ、爺は何を思ったのか、飯を食わせてやるからついでこいと言った。七兵衛は逃げようと思ったのだが、すっかり腹ぺこで、思うように走れない。他に思案もなかったので、足を引きずってついていった。

爺は屋台を引いててくてくと歩き、本所松坂町あたりまでやってきた。当時はまだ家数も少なく、爺が顎の先で指し示した家も、傾いた惨めな長屋の一角で、これならば、そのころ七兵衛が寝ぐらにしていた観音様近くのお稲荷さんの床下の方がずっとましなくらいだった。

もちろん、そこが爺の家で、障子を開けて入ってみると、なかは存外きれいに片づけられていた。爺はそこで、冷や飯に梅干しを添えて食わせてくれた。天ぶらはねえのかと訊くと、あれは商売ものだ馬鹿野郎と、ばかりとやられた。

爺は茶漬けを食ったが、七兵衛は飯を三度替え、三杯目は茶が間に合わずに白湯をかけて食った。爺は一杯だけにして、後は飯茶碗で茶を飲みながら、がつがつ食う七兵衛をじっと見据えていた。

七兵衛がやつと飯茶碗から顔をあげ、大きなげつぷをすると、爺は笑った。そして言った。おめえは、俺のとつ捕まえたかつぱらいのガキのなかでも、いちばんしぶとく逃げ出そうとした奴だ、今まで、二刻のあいだに八度も俺を走らせた奴はいなかったと、なんだか気持ちよさそうだった。

七兵衛は黙っていた。爺もしばらく黙っていた。それから、明日も飯は食いたいかと訊いた。当たり前のことなので、七兵衛は当たり前前じゃねえかと答えた。すると爺は、それなら明日も俺を手伝えと言った。

——働けば、飯は食える。世の中は、そういうふうにできてるんだ。

七兵衛は、このころの思い出話をするとき、彼をとつ捕まえ、結果的に彼の人生を立て直してくれたこの爺の名前を言おうとしない。ただ「爺さん」とだけ呼ぶ。そして、実を言えば、七兵衛と明ける。

「七兵衛ってのは、爺さんが捕まえて仕込んだガキのうち、俺が七番目だったからなんだ」

十六の歳まで、七兵衛は爺の屋台を手伝い、そこで庖丁のほんのいろはを覚えた。ずっとこのまま行くのかと思っていたら、あるとき急に、

——おめえの奉公先を見つけてきた。

と言って、吾妻橋近くの賄い屋に連れていかれた。そこで主人に引き合わされ、今日からおまえはここで働くのだと告げられた。

屋台の爺はせいせいした顔で帰ろうとする。七兵衛はあわてて追いかけた。するとまた頭をぽかりと殴られた。

——俺はおめえを洗い張りにかけてやったが、仕立て直しはできねえ。だから、あの親方に預けたんだ。有り難いと思え。

そして、すたすたと行ってしまった。それきり、一度も会いにきてくれなかったし、七兵衛には爺さんに会に行く暇などない暮らしが待っていた。

その賄い屋では、彼はまた七兵衛ではなくなり、「クズ七」とか「いぬ七」とか呼ばれた。主の庖丁人を頭に強固な上下関係のできているこの店では、野菜を洗ったり、荷物を運んだり、板場の掃除をしたりという下働きは、せいぜいそんな存在なのだった。

逃げ出そうとすると、なにしろ多勢に無勢なので、爺の屋台から逃げようとしたときよりも、もっともつとひどい目にあった。その代わり、どれだけ怒鳴られても叱られても、逃げずに働いていれば、飯と寝床はあてがってくれた。

「今考えてみりゃ、ずいぶん乱暴な仕立て直しだったな」

七兵衛は笑って、当時のことを振り返る。

「だけど俺は、おかげで庖丁を覚えることができたんだよ」

七兵衛はそこで十五年働いた。自分では、一年一年過ごしていくうちに、気がついたら十五年経っていたというくらい気分だったが、実は、腹をへらしてかっぱらいをしていたガキが、まるで別の人間に生まれ変わっていたのだった。

七兵衛は、好んでその賭い屋を出たのではなかった。主人が亡くなり、その跡を、七兵衛とは折り合いのよくなかった庖丁人が継ぐことになったので、追い出されるよりは先にしようと決めたという事情である。

それでも、仕事の口はすぐに見つかった。今度もまた賭い屋だった。その主人は、当時の七兵衛より八つ年長だった。父親代わりだった前の賭い屋の主人を失った後、今度は兄ができたような気分だった。

種を明かせば、この主人も、前の賭い屋の主人に育てられて一人前になった庖丁人だった。前の主人は、自分にもしものことがあったら、おめえが七兵衛の面倒を見てやってくれと、内々で頼んでいたものらしい。

——親父さんは、おめえに、いつかは自分の店を持つようにと期待していなすった。賭い屋でなくてもいい、屋台でも一膳飯屋いちぜんめしやでもいいから、独り立ちするようになってな。

なぜだろうと、七兵衛はいぶかった。兄貴分の主人は、笑って応じた。

——おめえには、それぐらいの腕があるからさ。

この続きは、書籍でお楽しみください。

◎ 注意

本作品の全部または一部を無断で複製、転載、改竄、公衆送信すること、および有償無償に拘らず、本データを第三者に譲渡することを禁じます。

個人利用の目的以外での複製等の違法行為、もしくは第三者へ譲渡をしますと著作権法、その他関連法によって処罰されます。